

墓から取り去られました

ヨハネによる福音 20:1-9

週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。

説教

主の復活を最初に知るのは女性たちでした。ヨハネの福音書を朗読しましたが、ほかのどの福音書を見ても最初に「からの墓」に気づくのは女性です。どうして3日目（金曜日を1日目として数えると日曜日が3日目になります）の早朝に墓参りにいったのか？理由は福音書ごとに微妙に違っていますが女性が「からの墓」を発見することは共通しています。彼女たちは主の復活を確信していて墓参りにいったのでしょうか、墓にいけば主に会えると思っていったのでしょうか。それは違うような気がします。

古株の刑事がカンで犯人をかぎつける、大学出のエリート刑事が科学捜査で犯人を追いつめる、ちょっと前のテレビの刑事ものではこのような設定があ

りまた。はなしを戻して、彼女たちにある種のカンが働いたとします。自分の感じたカンを頼りに墓に出かけて行ったとしましょう。マグダラのマリアには犯人を追い詰めるようなカンではなく「救い」を見分ける、嗅ぎつける、そのようなカンがあったのではないのでしょうか。理屈はわからないけれどどこに救いがあるのかを嗅ぎ分ける救いへのカン、そのような働きに導かれて朝早く、まだ暗いうちに墓にいったのではないのでしょうか。わたしたちにも「救い」に導かれるカンの働きが豊かにはたらきますように。

主の復活主日、イースターおめでとうございます。
